



Title	英語意味論研究
Author(s)	毛利, 可信
Citation	大阪大学, 1964, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/28668">https://hdl.handle.net/11094/28668</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"&gt;https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> >大阪大学の博士論文について <a>&lt;/a&gt;</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	毛	利	可	信
	もう	り	よし	のぶ
学 位 の 種 類	文	学	博	士
学 位 記 番 号	第	5	5	1 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 3 月 27 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学 位 論 文 題 目	英 語 意 味 論 研 究			
	(主査)		(副査)	
論 文 審 査 委 員	教 授 村 上 至 孝	教 授 田 中 健 二	教 授 和 田 誠 三 郎	

## 論 文 内 容 の 要 旨

本書は、英語の語法を意味論的に考察し、英語表現の特長を明らかにすることを目的とする。すなわち「Brentano-Marty-Funke-中島」の系統の意味論を基盤とし、これを発展応用して、具体的言語事実の解明を心理的に扱うものである。

「基礎理論」の部は、「意味」の定義からはじまり、「内部言語形式」と「真の意味」との峻別の必要を説き、意味の構造を、真理函数、命題函数的に扱い、これらと心理学で言う表象、判断、情意の概念との関係を述べる。

すべて、意味すなわち心的内容は無限の多様性を持つものに対し、各言語の持つ表現形式は、有限個の語句とパターンから成っている。従って、無限の意味を表現するのに、有限の手段しか持たない人間は、各国語ごとに、それぞれ独自の習慣によって表現の技巧を工夫してきた。その表現法を英語について、日本人の立場から考察するとき、その研究法が十分に客観的、科学的であれば、そこにあるいは英米人自らは気の付かないような英語の特長が浮きぼりにされ得るはずである。

さて哲学、論理学の方では、上記の命題函数： $"Fx \cdot Gx"$  などの記号を用いて文の意味を記述する。文法の方では、主として形式の方から、たとえば  $"S+V+O"$  などの記号を用いて文型をあらわす。ところがこの両系列の間に十分の連絡がない。

表現機能を完全に説明するには、具体例について、この両系列の分析を融合する契機が求められなければならない。その契機を、心理学的解説に求めるのが筆者のいう意味論であり、その意味論を記号化したものが「結論：表現函数論」である。

さて、「語法研究」の部は、この意味論を実証するための具体的語法の研究であって、その順序は、まず「量の表現」、「主語と述語の問題」、「あり方の Variation」から「擬似仮定」、「否定」、「and と or の諸問題」などに至り、函数論的考察が比較的 naturally 可能であるような語法について考察する。

いくつかの重要な問題点については、諸家の学説を批判しつつ、筆者独自の知見を試論として提出した(例:第8章,第12章,第13章,第21章,第24章など)。

以上の諸問題の総合的把握において、筆者は、英語表現の特長たる「名詞中心的」「直線的」「近似值的」「暗示的」という諸性質を体系的に考察し、かつこれを実証しようとしたものである。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は、著者が十余年にわたり、理論・実践両面から英語の語法を分析、記述した研究成果を整理集成したものである。本文 228 頁を分かつて、Ⅰ, 序論 (1 頁~7 頁), Ⅱ, 基礎理論 (8 頁~54 頁), Ⅲ, 語法研究 (55 頁~214 頁), Ⅳ, 結論 (215 頁~228 頁) とし、これに執筆年次表, 参考書目を添えている。

### (論文要旨)

英語の語法を意味論的に考察して英語表現の特長を明らかにすることが本論文の主目的である。言語形式に関する研究は、そのもつ心的内容すなわち意味を考察する意味論と、その外形を扱う文法や辞書の体系化とに分かれるが、この両者を有機的に結合したところに高次の意味論が成立すると思われる。

無限に複雑な心的作用またはその内容を「真の意味」(M)とするとき、それを表現伝達する外部形式はもとより内部形式 (ISF) もまた各言語によってそれぞれ特殊な制約を受ける。言い換えれば各言語のもつ表現形式は有限個の語句とパターンから成っている。従って無限の M を表限するのに有限の手段しかもたない人間は、各国語ごとにそれぞれ独自の習慣によって表現の技巧を工夫してきたのであるが、日本語を母国語とする日本人の立場から、却って英米人自身の気づかない英語の表現法の特長を浮きぼりにすることも可能である。

この研究が客観的なものであるためには論理学や数学の概念や方則を活用するのが便利である。Brentano によれば M は表象, 判断, 情意の三つに区分され、そのうち判断は単純判断 (SJ) と二重判断 (DJ) とに分かれ、DJ は主辞判断と賓辞判断から成る。主辞は Gardiner に従って「窮極対象」、賓辞は同じく「近似対象」と名づける。「もの」はすべて空間的には mass. 時間的には energy であるから、具体的なものは何でも mass-energy であって絶対規定を受けるが、われわれの判断は多くの場合 DJ として相対的特殊化を行なう。なお英語では「もの」を空間的に捉える特性がある (例 The picture is on the wall.)

文法的主語に述語 (述部) をを加えた言語形式を節と言い  $S+P$  として表示する。英語ではこの形式が愛好され、無限に複雑な M に対して ISF の根本的なものは  $S+P$  ただ一つしかない。従って同じ  $S+P$  でありながら実はその内に数個の  $S_1+P_1, S_2+P_2 \cdots$  を含むものが多い。なお M の単位は「もの」であるが、表現の方では「X が  $\cdots$  すること」も一つの単位となり、主語・目的語になりうる。これは ISF の比喩によって「こと」を「もの」なみに操作したのである。

さて本論文の中心部をなす「語法研究」の章では、この意味論の原理を各種の具体的語法に適用し

て検証する。本章は「量の表現」、「主語と述語の問題」から「否定」、「and と or の諸問題」に至るまで24種の語法を逐次検討するが、函数論的考察が比較的自然に可能であるような語法を取り上げる。いまそのうちから二つを例にとれば、

8. 二種の 'for all', 'all'には0%→100%と拡大してゆく方向に沿って握把された「拡大の all」と、→100%という極限に注目し、all の全量が観客的にみて少ないことを暗示するばあいの「限度の all」とがある学校文法などで、'for all+名詞'を'in spite of+名詞'と簡単におきかえているが、for 自体は、本質的には、「理由の for」であり、Not A for all B'において~Aと対照するためBの方に「拡大の all」をつけて用いたと見るべきである。また 'He may be ill, for all I know' などのばあい、for は「推論の for」であり、'all I Know=all my knowledge' の all は「限度の all」である。これにわざわざ 'to the contrary' を添える形が生まれたのは all を「拡大の all」と誤解したからである。このように 'for all' は二種に分かれるが、厳密には、all の尺度性に統一されるべき問題であり、all 一語で絶対量を表わすところに英語の抽象性をみることが出来る。この意味に用いられた all は常に $f(X)$  であって $X$ は0, 00の間を変動する。ただし原則的には0を含まないから、これは半开区間 $(0, 00)$ において定義された函数であると言える。

22. See how he always chooses the biggest. この文に出る 'how' は POD で '(with impressive force) that' と説明されている。この文で「see されるもの」を $y$ とおけば、 $y$ は「彼の選び方」によって決定される。彼が選びとるものを変数 $x$ とすれば $y$ は $x$ によってきまるものである。ゆえに  $\text{how he chooses} = y = f(x)$  とおくことができる。この際 $f$  (函数) ということに意味があるのは、 $x$ がさまざまに変わりうるからで、それを how が表わしている。そこで (how) he chooses the biggest= $y = f(a)$  では、特定のものを選ぶのであるから $x$ の数値はきまっている。[「biggest なもの」を $a$ とすれば、この場合 how... の意味するものは $x=a$ とおいたときの $y$ の値であり、固定したものであるから意味を持たず無内容化する。それにもかかわらず how を残して that としないのは、あたかも $f(x)=x^2$ において $x=3$ の数値を代入したときの数値を9と記さず $f(3)$ と記すのと同じである。[how に 'impressive force' が感じられるのは、特定の数値 (定数) があくまで函数の特定値であることを暗示するからである。

さて、哲学・論理学における文の分析と、文法における文の分析とを融合する契機を、心理学的解説に求めるのが著者の意味論であり、その意味論を数学的に記号化したものが「結論、表現函数論」である。

すべて思考といい言語といい、いずれも生きたもの、変動値であるから、表現函数は変動値の研究である。特に表現函数という語を用いるわけは、対象が真理函数と命題函数とにわたっていることのほかに、Mと対照された表現形式そのものの函数化をも問題にするからである。

例えば a) Some birds cannot fly. b) There are some birds which cannot fly. において、SJ を起こさせる契機は  $x$  cannot fly の $x$ を、 $X$  (論理学上の $f(X)$ ) とし知覚したというところにある、a), b) 共に根本の函数形式は  $x$  cannot fly であるが、表現論ではその区別が問題になる。すなわち「もの」を $X$ とおけば、a) は $X$ の論理積を作る過程であり、b) はその積をさらに $X$ の1次項で把握したもの (修飾語と $X$ との積) を含むから、a)  $X \text{ is } Xp = Xs \cdot Xp$  (' $s+p$ 'の表現函数)、b)

There are MX (修飾語+「もの」), M=「Xp の特定値」という形に区別される。

SJ の表現に当り Xs・Xp 型の表現は論理的に必要なのに英語ではこの型を好む。そのさい SJ の表現であることから Xs は退化し Xp が M 化する。一方 DJ において Xs is Xp の Xs が, mass-energy のうち mass の面で捉えられたとき, 一般に Xp は名詞・形容詞であり, Xs・Xp の型で S is P という連結動詞が用いられる。また Xs がその energy の面で捉えられたとき述語動詞が Xp となる。ただし He swims well. と He is a good swimmer. との対応に見るように, S+P と S is P とはしばしば代替的である。

Xs・Xp と MX との関係は, いま係数を無視することにすれば  $y=X^2$  の曲線を取り, その曲線の中に無限集合を作っている点を  $X^2$  と見るか, その方向係数  $2x$  によって規定された点と見るか, という二つの見方の関係に当る。言いかえれば, 一般に, Xs・Xp を 2 次項として把握することと, これを一つの積として MX として把握することとの違いは,  $X^2$  なるものを, そのままの姿で捉えることと, これを (方向)  $2x$  (を持つ点) として捉えることとの相違に帰着する。

要するに英語の表現の特長は, MX 的 (名詞中心的), 直線的 (1 次函数的), 近似的な性質と, 量の表現に見られる函数的, 暗示的な性質とである。これらの性質が一面において比喩的技巧の過剰をもたらしつつも, 他面において知的・科学的な表現に適した言語形式を生み出している。

(本論文の評価)

Brentano の心理学に基づいて言語のもつ「意味の意味」に検討を加えたのが Marty. Funke であり, その学説をふまえて言語形式のもつ複雑多様な意味を要素的な心的現象に分析し, 心理学を援用して文法的事実の原理を追求したのが中島文雄氏である。著者はこれら先人の立場を十分参酌しながら, さらに数学, 記号論理学の諸概念を導入することによって, この学派の立場を一そう強化発展させようとしたのであり, その理論の展開の極めて明快精確なこと, その所説に多くの独創的卓見が含まれていることは何びとも否定できない。

本論文において, 英語自体の幾つかの特性が明確にされると共に, いわゆる規範文法の枠では律しえない英語の複雑微妙な表現法の多くが, 著者の理論の適用によって合理的に解明されている。快刀乱麻を断つとも言いたい著者の手並はまことに鮮やかである。

ただし鮮やかであることは多少の懸念を伴う。言語学は科学であるが, 言語は具体的なもの, 著者もいう「生きもの」である。その発生期以来根源的に宿している魔術的な性質, 論理以前のものたる特性をも具えている。心理学・論理学が言語学研究に有力な助けを与えることは明白であるが, 数式を持ちこんで抽象化する方法には限界があると思われるし, また, 意味論の側からの精緻な分析的接近だけでは, 文法特に統語法などと結びつくことが困難であろう。著者も「語法研究で「函数的考察が比較的 naturally 可能な」ものを取り上げた」と言っており, この章は注目すべき語法を多く扱ってはいるが, もちろん長い歴史を持ち現在も生々流動している英語の中には, それ以外に夥しい特殊な語法がある。また, 英語は知的記述に適していると同時に, 含蓄に富んだ情諸的表現にも適しており, 必ずしも名詞中心的でなくて, 擬声語や動詞の巧妙且つ豊富な利用によるすぐれた詩句を多く生んでいるのであるが, この特性は函数表現論が割り出しえない。

著者が本論文に引用した用例は, 「著者が読書の際にノートしたもの」であるが, この種の論文で

は出典の選択にいま少し慎重な考慮が望ましい。Austen, Bronte 姉妹, Dickens, Thackeray などに関しては適切であるが, Christie の探偵小説12篇から合計31箇所をあげながら, Hardy については凡作の短篇 "The withered Arm" 一篇のみに頼り, Henry James, Forster, Lawrence など定評ある大作家も利用されていない。詩人がほとんど無視されているのはやむをえないとしても, Arnold, Pater, T. S. Eliot など卓越した批評家から文例を求めるべきであろう。著者の本論文における目的は, 近代の, いなむしろ現代のわれわれに身近かな, 英語について意味論を展開することにあるが, 欲を言えば, Chaucer なり, Shakespeare なりの時代にも材料を求めて初めて重層的・立体的な英語意味論が成立するのであり, 今後この方向に研究を推し進め, 十全な意味での英語意味論が完成されることを期待したい。

しかしながら, この懸念や希望は本論文の本質的価値を何ら左右するものでなく, S+V+O などの記号を用いて文型を表わす文法と,  $Fx \cdot Gx$  などの記号を用いて文の意味を記述する哲学, 論理学との連絡を計って表現函数論を提唱した著者の業績は, 意味論研究に新しい光を投じた一つの重要な貢献として高く評価されねばならない。ここにわれわれは本論文が, 文学博士の学位を授与するものと認定する次第である。